

■国際シンポジウム「中期ホライズンにおける多様性と共通性」参加報告
土井正樹（京都文教大学非常勤講師）

2013年2月16日に、国立民族学博物館第6セミナー室において、国際シンポジウム「中期ホライズンにおける多様性と共通性」が、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（代表 関雄二 国立民族学博物館教授）の主催および古代アメリカ学会の協力により開催された。ここでは、シンポジウムの概要について報告させていただく。

本シンポジウムでは、ニューヨーク州立大学ビンガムトン校のウィリアム・イズベル教授、ペルー・カトリック大学のルイス・ハイメ・カスティージョ教授、ペルー国立クスコ・サン・アントニオ・アバド大学のジュリーノ・サパタ教授、南山大学の渡部森哉准教授、そして私の計5名による報告がなされた。このシンポジウムは、中央アンデス地域の編年で中期ホライズン（紀元後650-1000年）と呼ばれる時期を対象としたものであり、各報告ではとくにワリ社会に焦点が当てられていた。ワリ社会は、ペルー中央高地南部のアヤクーチョ谷を本拠とし、現在のペルー山岳部および海岸部に広く影響を与えた、中期ホライズンを代表する社会として知られている。各報告者はそれぞれペルー国内を中心として異なる地域でワリ社会に関連する遺跡を調査しており、ワリ社会に関して地域的にバランスのとれた報告が行われた。

冒頭に、オーガナイザーである国立民族学博物館の関雄二教授より挨拶があった。続いて、もうひとりのオーガナイザーである渡部森哉氏より、このシンポジウムの趣旨として、近年増加しつつあるワリ社会に関する資料について正確に把握することを目的としていることが述べられた。



(写真提供：科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト)

最初の報告は、ワリ社会研究において主導的役割を果たしてきたウィリアム・イズベル氏によるものであった。イズベル氏の発表では、主にペルー中央高地南部アヤクーチョ谷のワリ遺跡とコンチョパタ遺跡の資料に関する報告がなされた。注目されたのは、ペルー南海岸のナスカ社会との関連性を有する土器と、ティティカカ湖畔を拠点とするティワナク社会との関連性を有する土器に関する見解であった。両者が同時代に併存していたと考えられることから、イズベル氏は、ワリ社会の内部にナスカの宗教を信奉する集団とティワナクの宗教を信奉する集団とが存在していた可能性があることを指摘した。多様な集団をその内部に包括していたと考えられるワリ社会に対して、ナスカ系宗教集団対ティワナク系宗教集団という図式は単純過ぎるよう思われ、土器様式と集団との対応関係を知るには、それらの出土区域や出土状況も様式によって区別できるのかなど、より綿密な分析も必要であるとする。しかし、ワリ社会を異質な集団の集合にとらえ、ワリ社会内部の集

団の多様性に具体的に迫ろうとする本報告は、今後のワリ社会研究のひとつの方向性を示している。

昼食休憩をはさみ、次の報告を私が行った。アヤクーチョ谷は、首都が存在するワリ社会の中心地域であるが、1980年代のテロ活動によりこの地域での考古学調査は停滞したため、ほかの地域に比べワリ社会に関する調査数も限られている。とくにこの地域では、小規模な遺跡を対象とした調査と中期ホライズンに先行する時期からの通時的変化を解明するための調査が乏しいことを述べ、アヤクーチョ谷の小規模な集落の発掘資料に基づいた、ワリ社会とその前の時期のワルパ社会との連続性と断続性に関する報告を行った。まず編年に関して、土器様式とその出土状況の分析から、前期中間期後期と中期ホライズン前半（中期ホライズン1）とを明確に区別することが難しいことを指摘した。次に、農作物などの生産用具の分析および祭祀施設の分析の結果、前期中間期から中期ホライズンにかけて農耕生産の強化が生じ、重要な祭祀の場が消失した可能性があることを報告した。一般に考えられているようにワリ社会＝国家と想定するならば、このような小集落における変化は、国家による支配を反映している可能性がある。

しかし、近年の権力論やエイジェンシーをめぐる議論を考慮するならば、国家による支配だけでなく、小集落の住民の自律性にも目を向ける必要がある。そこで最後に、ワマンガ様式と呼ばれる土器の装飾の分析に基づき、小集落住民の自律性に関する報告を行った。分析の結果、前期中間期から中期ホライズンにかけての集落単位での自律性を示す証拠を見いだすことはできなかったものの、特定の装飾要素の出現頻度には地域性が認められ、その地域性がワリ社会内部における地域毎のまとまりを反映している可能性があることを指摘した。前述したように、アヤクーチョ谷でのワリ社会研究において小集落に注目した研究や通時的研究は稀であり、今後、このような調査・研究が増加することが期待される。続いて、クスコ地方で調査を続けるジュリーノ・サパタ氏により近年の調査による新発見に関する報告があった。クスコ地方には、ワリ社会を代表する地方行政センターであると考えられているピキリヤクタ遺跡が存在するものの、この遺跡を除き、長い間ワリ社会に関する資料は報告されていなかった。しかし近年、広大なワロ遺跡をはじめとし、ワリ社会に関連する多くの資料が発見されている。

サパタ氏による多数の写真を用いた調査報告は、私にはどれも新鮮な内容であった。なかでも以下の3点が印象的であった。まず1つ目は墓の副葬品である。氏が「エリート」の墓として紹介した墓からは、ワリ社会の中心地であるアヤクーチョ谷からは出土していない、金製品をはじめとする豪華な副葬品がみつまっている。アヤクーチョ谷では、ワリ社会の「エリート」の墓と考えられる手の込んだつくりの墓は、全てが盗掘もしくは攪乱された状態でみつまっている。したがって、クスコの事例は、ワリ社会の「エリート」の墓の様子を知るための貴重な手がかりとなる。2つ目は、クスコ地方でワマンガ様式土器がみつまっていることである。以前より、アヤクーチョ谷のワマンガ様式に類似する土器がクスコ地方に存在することは知られていたが、今回の報告では、予想以上にそれらが豊富に存在することを知ることができた。かつて、ワマンガ様式はアヤクーチョ谷内だけに存在すると考えられていたが、クスコ地方にも豊富に存在することは、アヤクーチョ谷とクスコ地方との間に強いつながりが存在したことを示唆している。3つ目は、アヤクーチョ谷のワリ社会の物質文化を模倣したものがクスコ地域に存在することである。ワリ社会の土器の模倣品や、ワリ社会に特徴的な帽子を表現した地元様式の土器などが存在することから、この地方の人々がワリ社会の装飾要素や物質文化を取り入れていたことが分かる。

渡部森哉氏からは、ペルー北高地のエル・パラシオ遺跡の発掘成果を中心とする報告がなされた。エル・パラシオ遺跡は、以前より、ワリ社会に特徴的な矩形建築が存在することで知られていたが、そこでの本格的な調査は行われてこなかった。渡部氏の調査により、この遺跡がかなりの規模を有していることが判明しているが、その全体像をつかむには、調査の継続が必要である。

写真を用いた報告により、部分的ながらも、直線的な壁によって構成される構造物や石

造水路が複雑に重なり合っている様子を知ることができた。遺物としては、ほとんどは地元北高地のカハマルカ様式の土器が中心であり、ごくわずかにワリ社会と関係する土器や骨角器が出土していた。興味深いことにカハマルカ様式とワリ社会的要素との融合や、ワリ社会の土器の模倣を示す土器がほとんど出土しておらず、地元の人々がワリ社会の物質文化要素を積極的に取り入れようとしていた痕跡は認められない。今後は、未解明な点の多いカハマルカの社会に関する調査・研究を進め、ワリ社会の物質文化要素が、どのような歴史的、社会的脈絡の中で現れてきているのかを明確にし、カハマルカ社会とワリ社会との関係を明らかにする必要がある。

このように、考古資料の解釈において歴史的、社会的な脈絡を考慮することの重要性を端的に示していたのが、本シンポジウムで最後となったルイス・ハイメ・カスティージョ氏による報告である。カスティージョ氏は、北海岸、ヘケテペケ河谷に存在するサン・ホセ・デ・モーロ遺跡の調査成果について報告した。サン・ホセ・デ・モーロ遺跡は、中期ホライズン以前より北海岸に栄えたモチェ社会に属する遺跡である。

サン・ホセ・デ・モーロ遺跡から出土しているワリ的な遺物は、墓の副葬品として出土しているものであり、墓の中でも最も豪華な墓にのみ存在することが報告された。カスティージョ氏によれば、このような現象は、モチェ社会の「エリート」が、自らの地位の差別化をはかり、社会秩序を維持するためにワリ社会の物質文化を必要としたことを示しているという。さらに、ワリ社会からの輸入品だけではこのような「エリート」たちの需要を満たせなかったために、ワリ社会の土器を模倣した土器が地元で製作されたという。実際に、サン・ホセ・デ・モーロからは、ワリ社会とモチェ社会の土器様式の特徴が1つの土器上に共存する例もみついている。カスティージョ氏が主張するように、このような証拠は、かつて有力であったワリ社会がモチェ社会を支配していたというモデルを支持するものではなく、むしろモチェ社会の「エリート」が、ワリの物質文化要素を主体的に取り入れていたことを示している。

こうした5人の発表の後、イサベル・ドゥルック（ウィスコンシン大学名誉研究員）、松本雄一（国立民族学博物館機関研究員）、佐藤吉文（国立民族学博物館外来研究員）、関の諸氏よりコメントと質問が投げかけられ、それを中心に活発な議論が展開した。

本報告を締めくくるにあたり、シンポジウムへの参加を通じて感じた、ワリ社会研究の課題について述べたい。これまでのワリ社会研究では、ワリ社会と関連する遺物や遺構が現在のペルー各地に存在することに注目が集まっていたが、今後は、そのような遺物や遺構が、各地域の歴史的脈絡の中でどのように現れてくるのかを厳密に検討する必要がある。このような調査・研究を通じて、ある地域ではワリ社会の物質文化の模倣や地元の物質文化との融合が生じているのに対し、ほかの地域ではそのようなことが生じていないという現象の理由やワリ社会の政治構造をより適切に説明することができるようになるであろう。

主催：国立民族学博物館、科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（代表：関雄二）

協力：古代アメリカ学会